

タッキーです。

今日紹介する本は、ヨハンナ・スピリが書いたアルプスの山の娘という本です。

小さく かつこハイジ とあるように、アルプスの少女ハイジの原作本になります。

あらすじはスイスアルプスを舞台にですね、五歳の少女ハイジが人嫌いで有名なアルムおじいさんの山小屋にむりやり預けられる場面から始まります。

とにかく人嫌いで知られるアルムおじさんですが、ハイジと生活を共にするうちにだんだん人間がまるくなっていきます。

そうしているうちにハイジの叔母の都合で大都会のフランクフルトのお屋敷につれていかれます。

ここで病弱な少女クララの相手役として生活が始まるんですが、山の生活から突然の都会暮らしでハイジはホームシックにかかってしまいます。

いろんな経緯を経て、こんどはハイジとクララがアルムおじさんのところで生活を始めるようになり、そこで様々な人間模様が展開するという物語です。

それでこの本をおすすめする理由は3つあります。

ひとつは原作本ならではのサプライズ、おどろきの事実があることです。

テレビ番組のおかげで、ある程度の年齢の方はハイジやアルムおじさんのイメージがあると思うんですが、このアルムおじさんですね。ちょっと怖い牧畜のおじいさんとして記憶している方が多いと思うんですが、もともと農民だったわけではありません。

原作本では、若い頃は傭兵、お金で雇われて戦争で戦う兵士だったことが明らかにされています。

解説しますと、スイスって永世中立国で平和国家と勘違いされるんですけど、実は古くから軍事国家なんですね。中世の時代からたくさんのスイス人傭兵がヨーロッパ各国の戦争で活躍していた現実があったわけです。

ふたつめは、この物語全体が暖かいストーリーで展開することです。

優しくて純朴なハイジがゆくところ、ハイジと出会う人々が感化されていく姿がとても感動的なんですね。

若い頃傭兵で一切教会にもかよわず、村人から鬼とまで恐れられているアルムおじいさんも、ハイジとの交流でついに「私は間違っていました、わたしは神の神子と名乗る資格はありません」と誰もみていない夜に涙を流して祈りを捧げる場面があります。読んでいて感動的でした。

そして重要なポイントに教育の大切さがあちこちにちりばめられています。

山小屋で生活するハイジは学校に全く通っていない、まったく教育を受けてないんですね。ハイジが大都会のフランクフルト、少女クララの家連れて行かれて、ここではじめて文字の読み書きを学びます。

その結果、賛美歌を口ずさめるようになります。アルプスに帰ってきた後、目の見えな

いおばあさんにキリスト教の教えを読み聞かせしてあげることができ、またハイジの友達ペーターもハイジの影響で読み書きができるようになっていくんですね。

じつはこの本、かなり宗教色が強いんですけど、人生の困難にも誠実に生きていきたいと思いますという筋の通ったストーリーが展開しています。

人々が良い方向に変化していく姿、他人は変えられないけど自分は変わることができる、なんて人生相談なんかでよくいわれますけれど、その理想型がこの物語で展開していくんですね。

みつつめは、宝石のような名台詞があちこちに出てくることです。

私が特に心にのこっているのが、

病弱な少女クララがはじめてアルプスの山小屋にやってきて食事するとき、おじいさんがこう言います。

「山の空気は、台所の不足をおぎなってくれますからね」

サポーターや職員の皆さんも経験済みかと思います。

あの山の中で食べるカップ麺の美味しさ、あれひとり部屋にこもって食べるのとひと味違いますよね。

こういう場面は自然体験ある人でないとなかなか書けない言葉だなあとと思います。

おすすめする3つのポイント併せた結論なんですが、この本は生きることの喜びを教えてくださいの本だと思います。

私は山を舞台にしたフィクション、小説とか漫画はほとんど読みません。なぜかという人が死ぬからです。

山は大変危険な場所な一方で、生きる力を与えてくれる所だと思います。また生きていく上で、他人との関わりも欠かせません。

この本にでてくる登場人物たちが山を舞台に、ハイジとの出会いを通じて変わっていく姿に、自分自身の生きていく方向を考えさせられる、そんな本です、機会があれば読んでみて下さい。